

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

その前に、ちよつとなじみのない表現かもしれないけれど、僕がだいぶ前から①「テイショウ」という考え方を紹介しょうかいしておきたいと思います。

②「エコロジー」ということは、自然環境かききやうを保護するための活動を指して使われているのを、よく耳にするよね。「エコ」と略して言ったりもする。でももともとは、生物とそれを取り巻く環境との相互関係そうごを調べる学問のことを言います。いまではとくに、人間と環境との相互作用についての研究を指すこともあります。

地球上の生物はみんな、それぞれが置かれた環境のなかで、まわりのさまざまなものとの関係を持ちながら生きている。たとえば、植物のことを考えてみよう。植物は、太陽の光や空気、土や水分に囲まれている。そしてそれらを取り入れることで、生長したり子孫をつくったり、酸素を吐き出はしたりしているよね。あるいは、別の植物と光を求めて③「キョウソウ」したり、草食動物に食べられたり、ときには人間にひっこめられたりもします。

そういうことすべてが、その植物と環境との相互作用なんだ。自然環境と、そのなかで生きているいろいろな生物とのあいだには、こういう複雑な相互作用のネットワークが結ばれていて、全体としてシステムを形づくっています。そのシステムのことを、「生態系」(エコシステム)と言って、これを研究する学問がエコロジーなんだ。

僕の考える「情報のエコロジー」というのは、この自然界を研究するエコロジーに④注1なぞらえたものです。僕たち現代社会の間が、メディアという環境のなかで日々さまざまな情報を送ったり受け取ったりしてネットワークをつくっている様子を、自然界のエコシステムと比べて考えることができるだろうか、という④「ハッソウ」なんだ。

⑤「まる」で生き物が呼吸したり食べ物せつしを摂取したりするように、僕たちは、テレビやPCやパソコン、ケータイや本や新聞といったものから、情報を受け取っている。そしてそれだけじゃなく、動植物が酸素を生み出したり子孫をつくったりするように、僕たちは、自分でも情報を生み出しています。

⑥、君が、テレビで紹介していた本を注²アマゾンで買ったとするね。君はそれを読んで感動した。ここまでは、君は情報を受け取る側だ。でも、今度は君が友だちにその本をすすめる。⑦、アマゾンに注³レビューを書き込んだり、ブログに感想を書いたりする。そうなる君自身が情報を生み出したことになる。⑧、その情報は誰かに受け取られて、また次のネットワークにつながっていく。そう考えると、僕たちが「情報の生態系」のなかに生きてるっていうのも、なんとなくイメージすることができるんじゃないかな。

そして、自然の生態系が僕たちの体をつくっていくように、僕たちは、いろんなメディアを通して他の人たちと情報を交換するネットワークのなかで、自分の意識を成り立たせて、「自分」をつくっている。⑨、「自分」っていうのは、情報の生態系の一部だってそういうふうに考えられるよね。さっき「組み立て」のたとえを話したけど、そこで言った自分の「情報の回路」っていうのは、だから情報の生態系の一部だと言い換えてもよい。そして、そのあり方、つくり方を考えていこうっていうのが、⑩僕の提案している「情報のエコロジー」という考え方というわけだ。

産業革命以後、人間が生み出したさまざまな技術や産業によって、自然環境が⑪急激に変化したことは、みんなもよく知っているといます。公害問題もその結果の一つだし、最近では地球温暖化のようなことも含めて、そうしたテーマは「環境問題」と呼ばれているよね。環境問題が注⁴クローズアップされるようになると、自然を守るためにも、それから人間自身も健康で豊かに生き続けていく——そのためにも、たとえば二酸化炭素を削減したりとか、新しいクリーンなエネルギー源を探したりとかっていうふうに、人類みんなが大きな注⁵ビジョンをもって計画的に考えることと、それから同時に、一人ひとりが環境に対する意識をもちながら生活を送ること——その両方が⑫不可欠だ、というふうによくの人が考えるようになった。

近頃は、飛行場やホテルみたいな大きな工事を計画するときには、事前にそれが環境にどんな影響を与えるか調べて評価しているという話や、その作業を「事前注⁶アセスメント」と呼ぶということも、聞いたことがあるんじゃないかな。それから、これは環境問題とはちよっと違うけど、僕たちが食べる物についても、偏った食事をしないようにとか、できるだけ自然に近いものを食べようとか、あるいは環境にもやさしい生産のしかたで作られたものを選ぶようになっていこうっていうふうには、いろんな人が意識的になってき

ているよね。

情報環境やそのなかでの僕たちの生活についても、^⑬「こういう視点をもつことが必要だと僕は思っています。二〇世紀以降、情報技術が急激に発達し、文化産業が発展して、人間をめぐる情報環境は大きく変化したからね。そして、情報環境の変化は、これまで見てきたように、人間の意識の成り立ち方や「人間の条件」までも変えつつあります。

なんでも便利だからって、産業やテクノロジーにまかせておくと、僕たちの「自分」を成り立たせている、情報の生態系が破壊はかいされてしまう可能性だってある。だから、科学技術を自然と調和しながら利用する方法を探るように、みんなが「情報のエコロジー」という考え方をとりいれて、情報技術をもっと自由に人間らしく使っていくにはどうしたらいいかを考えることが、とても大事だと思います。

『自分と未来のつくり方——情報産業社会を生きる』石田英敬

注1 なぞらえた・・・ある物事を似ているものと比べて、仮にそれとみなしたこと。

注2 アマゾン・・・通販サイト。

注3 レビュー・・・批評。

注4 クローズアップ・・・特定のことを大きく取り上げること。

注5 ビジョン・・・将来の構想。

注6 アセスメント・・・調査の上で決定すること。

問一 ——部①・③・④・⑪・⑫のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 ——部②『『エコロジー』』という「ことば」とは本来はどのような意味か。文中から二十五字以内でぬき出しなさい。

(句読点や記号は字数に入れません。)

問三 — 部⑤「まるで」と同じ働きをしているものを、次のア～オの……部の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 君はまるで分かっていない。

イ まるで夢みたいな話に聞こえる。

ウ そんな考えではまるでだめだ。

エ 兄弟であるけれどもまるで違う。

オ あの人はまるで子どもだ。

問四 部⑥・⑦・⑧・⑨に当てはまる言葉を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

(同じ記号を二回用いてはいけません。)

ア だから イ そして ウ しかし エ たとえば オ あるいは

問五 — 部⑩「僕の提案している『情報のエコロジー』という考え方」とあるが、筆者の考えとはどのようなことか。文中の言葉を使って、三十字以内で書きなさい。(句読点や記号は字数に入れます。)

問六 — 部⑬「こういう視点」とあるが、筆者は二つの視点を持つことが必要だと考えている。この二つの視点とはどういうことか。文中から、それぞれ三十字以内でぬき出しなさい。(句読点や記号は字数に入れます。)

問七 本文の内容と合うものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 私たちは様々なものから情報を受け取り、自分でも情報を生み出している。

イ 現代社会のネットワークは、他人の生み出した情報でつくられている。

ウ 産業やテクノロジーにまかせておけば、私たちの情報の生態系は発達していく。

エ 情報技術が発達したとしても、人間の意識の成り立ち方までは変わらない。

オ より高度な情報技術を取りいれてこそ、自由な人間になっていくことができる。

カ 科学技術を自然と調和させるように、人間らしく情報技術を活用することが大事である。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

《陸上部に所属する北川遠子は、長距離を走るのが好きで、去年の大会で一〇〇〇メートルを走り、五位だった。クラス委員の平田愛子とともに練習にはげんでいた》

五年の十一月になってすぐ、顧問の緒方先生に呼ばれた。

「北川、今度の地区大会のことだがな」

前に立つと、薄青のトレーナーの①ムネが広い。かぶさってくるような大きさだ。

「おまえ、一〇〇〇メートルやめて、ハードルに変われ」

「ええ、嫌です」

②後ずさるうとする足を止め、ふんばり、先生を見上げた。

「うん」

緒方先生の首が少し揺れる。先生は、遠子から③シセンをそらさなかった。

「北川が一生懸命、走りこんでたのは、知っている。けどな、記録がちよっと伸び悩んでるだろ。ここは思いきってハードルに切り替えたほうがいいんだ。いや前から北川をどう使うか悩んでいたんじゃないや。はつきり言って、おまえの一〇〇〇の記録、これ以上あんまり伸びないような気がしてな。北川は、足が長いし、瞬発力がある。ハードル向きやと思う。ちようどハードルに出場する選手がおらんし、ええチャンスだろ。長距離ばかりじゃのうて、自分の可能性にチャレンジしてみいや。大会まで時間ないしな。競技種目を変えるんなら、今がぎりぎりなんだがな」

薄青のトレーナーが、一歩近づくと。

緒方先生の笑顔が近づく。

遠子は、つばを飲みこんだ。

「うち、嫌です」

④ 緒方先生の口元が引き縮まる。

「北川、この記録表見てみい。先々月から、全然、記録が伸びてない。むしろ落ちてる。いや、そんな時期もあるんだが、ちよつと不調が長すぎる。このままでは、一番不調なまま記録会と、ぶつかってしまふぞ。それならいっそ、ハードルに変わったほうが、おまえの瞬発力を生かせるぞ。なつ、先生には、わかるとるんだ」

⑤ 先生には、わかっている。ほんとうに、わかっている。西日を背にうけて、先生は、大きな彫像のように見えた。⑥ 遠子は、黙つてうなずいた。

その日から、雨の降らないかぎり、毎日ハードルと向かいあつた。

ハードルでは、周りの景色は消えない。自分だけの息や汗を感じることは、できなかった。

「ええな、ハードルをまたぎこすリズムをつかむんじや。それと、高く跳び上がるな。振り上げた足をまっすぐに伸ばして、ぎりぎり上を跳ぶ」

緒方先生の⑦ シジを身体で覚えるのに必死だつた。

必死になつた分、⑧ 記録は、どんどん上向いていった。

「うん、また、縮まつた。調子ええぞ」

ストップウォッチを見せて、緒方先生が笑う。

「なつ、先生の言うたとおりだろ。北川は、ハードルに向いとるんじや」

「はい」

返事してから、遠子も笑おうとした。笑えない。まだ、ハードルがこわかつた。

「なんか、ハードルって意地悪みたいに感じる」

練習の後、暗くなつた運動場で愛子に言つてみた。

愛子は、声をたてて笑った。

「トコちゃん、おもしろいこと言うな。それって、苦手意識をやつじやる。いっぱい練習したらだいじょうぶじゃ。そばで見とつたらフォームなんか、すごいきれいじゃで」

「練習か」

「そうそう努力、努力。うちもリレーのアンカーになったし、一〇〇も走るし、がんばるつもり」

⑨ 遠子は、お正月も練習を休まなかった。

元旦、初詣がすむとすぐ、^⑩コウテイにやってきた。用具室にカギがかかっていたので、ハードルは出せなかった。走り込みと柔軟体操を一時間ほど、一人でこなした。

二日目。学校へきてみるとハードルが並んでいた。緒方先生が、やあと手をあげた。そばに愛子もいてVサインを出している。「いやあ、今朝、ぐうぜん北川のお母さんに出会ってな、昼から練習に行くと言いたもんだから。北川がこんなに熱心に練習しているのに顧問のワタクシメがぼけつと正月しとるわけにはいかんじゃろ」

「トコちゃん、練習するんだったら、うちも呼んでよね。先生に教えてもらわなかったら、こつちこそぼけつとしてお正月、すぐとこだったか」

「あほやな、平田は。おれに教えてもらわんでも、北川みたいに自主的に練習しようと思いついたらよかったんだぞ」

「先生、かわいい生徒をつかまえて、あほとはなんですか」

愛子がこぶしを握って、振り上げる。

「わわっ、怖いな。よし、そのまま手を振って、準備体操だ。その後、ランニング。始め」

運動場を駆け足で回りながら、愛子が耳元でささやいた。

「ねえトコちゃん、緒方ってわりによいところあるよね」

「えっ、いいところって？」

「だって、お正月じゃで。こんな時まで練習に付き合ってくれるんじゃないから、いいところあるが」
あつ、そうかと思った。

休みを返上してまで、付き合ってくれる先生なんて、そういるもんじゃない。
確かにそうだ。

なのに、^⑪少し息苦しかった。

準備体操、ランニング、ハードル練習、ストレッチ。

今日は、緒方先生の言うままに練習をこなしていかなければならない。

真冬にしては、暖かな光の中で、白と黒に色分けされたハードルは妙によそよそしく、気取った大人のように見えた。

三学期に入ってから、遠子の記録は少しずつ縮まっていった。

「ええぞ、北川。もう少しで去年の大会記録に並ぶぞ。大会まで日がないからな、ダッシュ、ダッシュ」

ダッシュ、ダッシュと緒方先生の声が背中を押す。こんなじゃないと思う。記録、成績、何分何秒。数字に追いたてられて苦しくて……走るのって、こんなじゃないと思う。

大会が終われば、すぐにハードルをやめるつもりだった。ハードルをやめて、なんにも縛られずに、自分のために走りたい。大会が待ちどおしかった。

ところが、記録会の種目から突然ハードルが除かれてしまった。

「先週、隣町で事故があったやろ。ハードルに足ひっかけて、^⑫コロンだ中学生が、大けがしたやつ。もし、小学生の大会で、続けて事故があったら困ることになったらしい。しょうがない、北川は、また一〇〇〇にもどれ。まったく、あれだけ練習したのに、残念やったな」

早口に説明する緒方先生の前で、遠子は^⑬棒のように立っていた。

問一 ―― 部①・③・⑦・⑩・⑫のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ―― 部②「後ずさろうとする足を止め、ふんばり、先生を見上げた」とあるが、この時の遠子の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア わかりきったことを言われ納得する気持ち。

イ 驚きながらも決して受け入れたくない気持ち。

ウ ハードルの力が認められてうれしい気持ち。

エ わかっていたこととはいえおもしろくない気持ち。

オ いつか何とかなるという楽天的な気持ち。

問三 ―― 部④「緒方先生の口元が引き締まる」とあるが、この時の先生の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 種目を変えることを遠子が嫌だとは思ってもみなかった。

イ 生意気なことを何度も言う遠子のが腹立たしい。

ウ 遠子がきつぱりとした返事をしたのでたのもしく思った。

エ 何度も種目を変えることを断る遠子を何とか説得したい。

オ このままでは遠子が陸上をやめてしまうと思うと残念だ。

問四 ―― 部⑤「先生には、わかっている。ほんとうに、わかっている」とあるが、先生には何がわかっているのかを二十五字以上三十文字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問五 ―― 部⑥「遠子は、黙ってうなずいた」とあるが、遠子はなぜうなずいたのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一〇〇〇メートルよりハードルの方が好きになってきたから。

イ 先生の気持ちがよくわかり、種目が変わる方がよいと考えたから。

ウ 大きな彫像のように見えた先生がほんとうにこわかったから。

エ だんだん自分がハードルに向いていると思うようになってきたから。

オ これ以上顧問の先生に反抗するのが嫌だと思ったから。

問六 — 部⑧ 「記録は、どんどん上向いていった」とあるが、記録はどうなったのか。文中の言葉を使って書きなさい。

問七 — 部⑨ 「遠子は、お正月も練習を休まなかった」とあるが、その理由を三十字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問八 — 部⑩ 「少し息苦しかった」とあるが、遠子はなぜ息苦しかったのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 愛子が休みを返上してまで練習に付き合ってくれたことが遠子にとってとてもうれしかったから。

イ 遠子は努力してもなかなかハードルがうまくなれなかったことがつらかったから。

ウ 真冬に緒方先生の言うままにハードルの練習をこなさなければならぬことが面白くなかったから。

エ 一〇〇〇メートルにくらべてハードルのほうが距離が短いのに息は苦しかったから。

オ 先生が正月まで練習に付き合ってくれたのに、遠子にはまだハードルをするのに抵抗があったから。

問九 — 部⑬ 「棒のように立っていた」時の遠子の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 心の中につかえてたものがすっかりなくなりほっとして安心した気持ち。

イ ハードルの手ほどきをしてくれた先生の気持ちがとてもありがたいと思う気持ち。

ウ あれだけ練習したハードルがなくなりこれまでの努力はなんだったのかという気持ち。

エ 正月までともに練習に付き合ってくれた愛子に対してもうしわけなく思う気持ち。

オ 嫌だったハードルを走らなくてよいことがわかってあきれてしまった気持ち。

問十 本文の内容とあっているものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 遠子は、ハードル走はずっと練習してきた種目なので得意だったが、一〇〇〇メートル走は走ったことがなかったので苦手だった。

イ 遠子は、一〇〇〇メートル走は自分のために走っていたので楽しかったが、ハードル走は自分の意志とは無関係にやらざれていると考えていたために走ることを楽しめなかった。

ウ 遠子は、一〇〇〇メートル走は好きで長い間やってきた種目だったが、今後とも一〇〇〇メートル走を続けたいとは思っていない。

エ 遠子は、よい結果を出すためにハードル走に出場することになったが、距離が短いので自分だけの息や汗を感じることができなかった。

オ 遠子は、一〇〇〇メートル走が勝つためにやりはじめた種目だったので、これからも一生懸命練習を続けて記録を出したいと思っていた。

カ ハードル走は、遠子にとってはとても楽しい競技のため一〇〇〇メートル走から種目を変えたことは非常に良かったと思っている。